

ADULT  
ONLY!!

# サキユ! すばっ

「何でもするって!?!」  
その言葉を言われて  
我慢出来る童貞はいない!

本編228P+おまけ17P+差分86P



ADULT  
ONLY!!



「何でもするって!?!」  
その言葉を言われて  
我慢出来る童貞はいない!

本編228P+おまけ17P+差分86P

俺はカズマ。冒険者だ。

いつも頼りないパーティーメンバーの尻拭いばかりをしている苦勞人だ。



この前も打ち上げで泥酔した  
駄女神アクアにまたあの忌々しいいまいま  
“呪いのチョーカー”をつけられて  
しまったのだ。

ウイズの魔道具で“願いを叶えないと  
首を締めつけられて死んでしまう”  
という、あの呪いのチョーカーである。  
前回は願いがわからず苦労したのだが、  
今回の願いは検討がついている……。



「割引券も持ったし今日は  
どんな夢を叶えて貰おうかな。」

サキユバスが経営する  
“えっちな妄想”を夢で叶えてくれる  
その店は街の男性客の御用達だ。  
こようたし

このチョーカーをはめてから俺は  
呪いを解くためにこの店に通っている。



「ふふ…俺もこの店には  
随分と慣れてきたな…。」



呪いを解く為にこの店に  
来ている事からもお察しの通り…。

今回の俺の願いは「えっちな  
事で間違いないはずだ。」

前回の願いがそうではなかった事の  
方が自分でもおかしいと  
思っていたくらいなのだ。



そこで俺は連日サキュバスの  
お姉さんに夢を叶えて  
もらっているわけなのだが…。



今のところチョーカーは外れていない。  
どうやらプレイの内容に  
問題があるらしい…。

そろそろ呪いのタイムリミットも  
近いという事で俺は思いつく限りの  
プレイを今日は希望してみる事にした。



「あと試してないのは  
ハーレムものだな♡」



「3Pや4Pは童貞だった  
俺にはハードルが

高かったが今ならいける気がする♡  
夢の中なんだし、現実ではできない  
事に挑戦しないと駄目だよな♡」

相手はとりあえず

アクア、めぐみん、ダクネスの  
3人で決まりだな♡

あの3人でも無理なら

ゆんゆんやエリス様も追加してみるか♡

そんな事を妄想しながら

意気揚々と入店した。



「さっさと帰るからね♡」



相変わらずサキユバス

姉さんの衣装は素晴らしい♡

入店しただけで俺のムスコが

疼うずいてしまう♡



「あっ……カズマさま……。」



「本日もご来店  
ありがとうございます……。  
あちらで必要事項の  
ご記入をお願いします……ね。」



ん？なんだろ？

今日はお姉さんの様子が  
少し余所余所よそよそしいような…。

毎日来すぎて引かれちゃった…かな？



まあ♡気にする事はないか♡

そんな事より今はハーレムの妄想を  
膨ふくらませるのに忙しいのだ♡



「それでは座席まで  
ご案内致しますね…。」

「よろしくお願ひします♡」



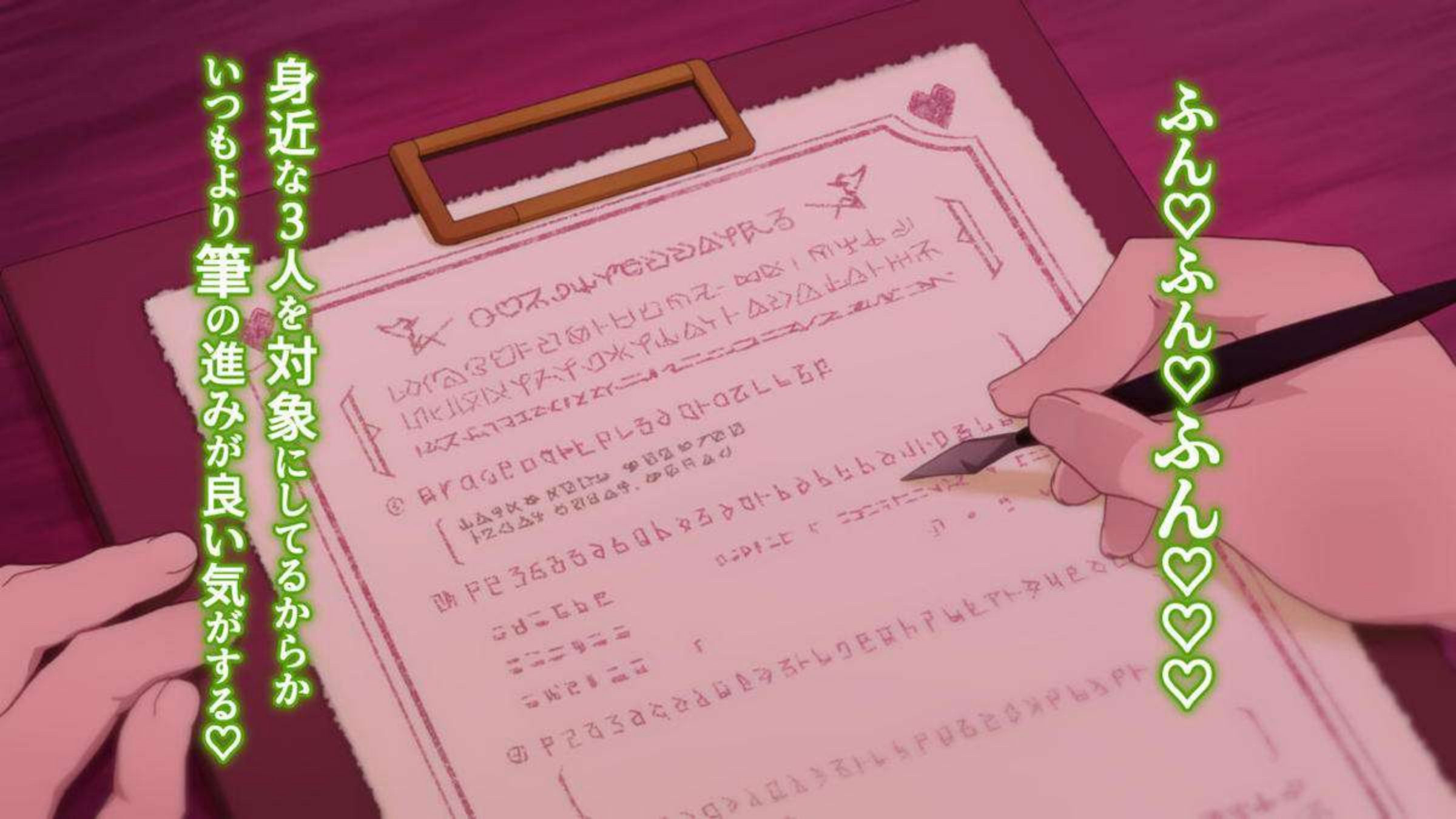
あの3人…いつも俺の言う事なんて  
聞きやしないからな。

夢の中では沢山ご奉仕してもらおう  
じゃないか♡



身近な3人を対象にしてるからか  
いつもより筆の進みが良い気がする♡

ふん♡ふん♡ふん♡ふん♡ふん♡





「お姉さん出来ました♡」

「今日もいつもの

コースでお願いします♡」

「は…はい」  
「そのまま席でお待ちくださいわ…。」

ムフフ♡

我ながら欲望全開な事を

書いてしまった♡今から楽しみだな♡





「そうは問屋とんやが卸おろさないわよっ！  
ひゃー！ーと！！」

「その紙をこちらに  
渡しなさいっ！！」



「え!?!」

「おっおい!?!ど…どうして

駄女神がいるんだ!?!」

いや…アクアだけじゃない…  
めぐみんとダクネスも  
いるんだが…!?!

「お前達っ!!」

「体なんでここに…いるんだ!?!」





「呪いを解くためにこの店に通ってるって情報を入手したから張り込んでたのよ!!  
まさかこの街に魔物が経営する店があったなんてねっ!!」

「でも安心しなさい! 今日はこの水の女神アクア様がこの店を貸し切ったわっ!!」





な…何？

か…貸し切っただど!?

それよりもここはにょにんきんせい女人禁制の

神聖な場所。

しかもサキユバスなんだぞ…

この駄女神…何かしてないだろうな!?

「お前…まさかサキユバスの

皆様やお店に迷惑かけてないだろうな？」

「そりゃ最初は退治も考えたけど

街の男どもに泣いて謝られたからね。

仕方ないから”一日店長”として

こうして協力してもらおう事にしたわ！」



「協力って…お前達…。」

「一体何を考えてるんだ…?」

「それです!それですよカズマツ!!」

「カズマの願いなんて

どうせロクでもない事だろうと

わかっていましたが、私たち

“美女”3人が近くにいなながら、

こんな如何<sup>い</sup>わしい店に通うなんて

どういう事ですか!？」

「絶対に許せませんよ!!!」

何を言ってるんだこの娘は…。

後ろに控えていたためぐみんが

大声で話に割り込んでくる。





「そ…そうだぞ…カズマ

近くに…び…美女が3人も  
いりゆのに…失礼だぞ…。」

「わ…私だって…

許さにやいんだから…な？」

ダクネスは…ただの付き添いかな？  
それにしても凄い格好してるな…。

「許せないと言われてもだな…。

呪いを解くためとはいえ、

お前達に頼むわけにもいかないだろう？」



「だからってこんな事されたら  
女神のプライドが傷つくんだからッ！  
許せないわッ!!」

「そもそも今回は私が原因なんだから…  
私に相談すればいいでしょっ!!」

「そうです!!紅魔族だって  
許しませんよッ!!」

「き…貴族には…関係ないが…  
カズマの望みは…  
私が一番…叶えれそうだし…な」



「おいおいマジで

言ってるのか？お前ら？」

「冗談でこんな事を

言うわけないでしょ？」

「ちよつとそこのサキユバス！

奥の部屋を使うから

後は任せたわよ!!」

アクアが大声でそう言うのと

カズマは店の奥に引きづられていった。

ぐえええええつつ……。

「アクアさま……ごゆっくりどうぞ……。

絶対に退治はしないで下さいね。

約束は守ってくださるよう……」



「さて……この部屋なら大丈夫ね。  
カズマのくだらない望みくらい  
さくっと叶えてあげるんだから！」



そういうとカチツとドアに  
鍵をかける音が聞こえた。

窓もないその部屋にはベッドや  
トイレ、大量のシュワシュワ……  
そして出口は一つだけ……。

これは……やばいな……逃げれそうにない……。  
そう俺が観念していると3人は  
先程書いた俺の用紙を読みだした。





「ちょっとカズマさん！

この要望はなんなのツ!?

なんかあたし達3人に向けたような  
内容になってるんですけどツ!?

「ちょっと引くわー!。」

くっ……いつもはセクシーなお姉さんで  
頼んでいたのに……。

たまたま今日に限ってこんな要望を  
出してしまおうなんて……。

これは言い訳しても通じないな……。





「し…仕方ないだろっ！」

実際やるわけにもいかないし…。

こんな時くらい夢を

叶えてもいいだろっ！」

俺は逆ギレ気味に叫んでいた。

「な…にキレてんのよカズマさん！」

「その夢を私たちが叶えてあげるって、

さっきから言ってるんじゃないのっ！」

こんなサーブスは最初で

最後なんだから感謝しなさいよっ！」



元もとはと言えは  
こいつのせいなんだが…。



サービス？…夢を叶えてくれる…？  
結局こいつらが店に押しかけて  
きたのは、俺に奉仕するためって事で  
いいんだ…よな？  
何でもしてくれるって…こと？

と…この顛末てんまつを  
カズマが理解し始めた時。

「ダクネス!!まずはあなたからよっ!」

「よ、よし…任せておけ…!」

強気な言葉とは裏腹に凄く

恥ずかしそうに近づいてくるダクネス。

その近づくダクネスに状況を把握した

カズマがとった行動は…。





もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡

もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡

もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡

もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡



もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡もみ♡

カズマが取った行動はダクネスの  
おっぱいを躊躇ためらいもなく  
揉みまくる事だった。

「んんっ……お……おいカズマ……  
普通……いきなりこんなに堂々と  
揉みだすか？」

「ちゅ……躊躇ちゅうちゅうというものが  
ないのか……お前は……」

「うるさいなあ♡

言い出したのはお前達だろお？」



「ほら…後ろを見てみる…」

アクアとめぐみんが引いてるぞ…」

そんな事を気にする俺ではない。

それよりも**今**重要なのは

“おっぱい”だ♡

柔らかさと弾力を兼ね備えた

このおっぱいを揉むのに

忙しいのだ♡

サービスしてくれるってんだから  
全力で応えないとな♡



むっ♡♡

「ん♡ん♡ふう♡はあ♡ん♡ん♡」

ダクネスも感じてきたのか  
口数が減ってきたな。

「ダクネス？そろそろ乳首も  
弄いじってほしいんじゃないのか？♡」

「ま…またお前はおっさん臭い事を…」

「私の事は気にするな……カズマは  
好きに願いを叶えれば…いいんだ…」

またまたこのお嬢様は

強がり言っちゃって♡

まあお言葉に甘えて好きに

続けさせて貰うけど♡







「ば…ばかつ…  
舌で…転がすにやあ…あ…あ…♡」

ダクネスのこりこりした乳首をベロベロちゅーちゅーと虐めていると、それを見て赤面しているアクアとめぐみんの会話が聞こえてくる。

「赤ちゃんみたいに吸っちゃって…  
カズマさんには羞恥心しゅうちしんというものが…  
ないのかしら…」

「私達に見られながら…  
よく出来ますね…」

俺は今まで街中でパンツを振り回し…  
3人には何度もちんぽを見られている。  
とつくにそんなもの“羞恥心”は捨てている。







はあはあはあはあ……

「カ……カズマ……そろそろ……」

満足したんじゃないのか……？」

どのくらい揉んでいたんだろう……

顔や手が埋まるくらいの

柔らかくて大きなおっぱい……

満足なんてするのだろうか？

ぽろぽろ♡

「何を言ってるんだクネス？

まだまだ揉み足りないに

決まってるだろ？」

「♡ぽろぽろ♡」



「ダクネスの鎧の下は

こんなに綺麗なピンク色の

乳首が隠れていたんだな♡」

「さすがララテイナーナお嬢様だ♡」

「き、貴様という奴は…

こんな時に…その名を…

呼ぶとは…っつて」

「きゅんんんんん♡♡♡」


「人が話してる時きゅらっ…

少しは加減しろっ!」

乳首の先を…

つつきゅ…なあ…あ♡」





どMのダクネスの反応は  
本当にエロくて面白い♡  
このままずっとおっぱいで  
遊んでも良かったのだが……。

実は途中からダクネスの大事な所に  
目が行って仕方がなかったのだ。

「ところでダクネス……。

気になってたんだが…**下の方が**  
凄いいいことになってないか?♡」



「き、貴様……。」

だから私のことは別にいいだろ……  
ほつといってくれー！」

「お前の目的は  
“おっぱい”なんだろう!？」

それはそうなんだけど……

ずっと足をもぞもぞしてるし……

凄い量の汁しるが

滴り落ちているんだよな……。



「あっ！そうか！わかったぞ！」

「おっぱいを弄いじられて

感じてただけじゃなくて、

こんなV型の衣装だから

引っ張られて

食い込んでいたんだなッ！」

カズマはまるで名探偵のような  
口振りで謎を解いた。

「そんな考察はしなくていいッ!!」

「な、何を大声で

言い出すんだ貴様はっ!?!」

この事態をみて見過ごせるわけないよな♡



「お、おい…カズマ!?!」

「おっっぱいだけじゃなかったの…か!?!」

「こんなに濡れてるのに、  
ほっとくわけにはいかないだろ?」

こんな状態のダクネスを

介抱しないわけにはいかない。

カズマは“仕方なく”ダクネスの服に

手を突っ込み、おまんこを触ろうとする。



「やっやめろお!!」

い…今…触れられると

やばいんだっ!」

「み…皆の前でイっちやうだろお!」

長い時間おっぱいを  
弄いじってやってたもんな…  
しかも服が食い込んで  
いたんだろ…?」

ダクネス…お前…

ずっと感じてたんだよな…?」

気づいてやれなくて…ごめんな…♡



「待て！待て！待て！待て！

本当に待っててくれ!?

今そこは…まずい…。

まずい……かりやあ…♡」

「見られてる…♡

2人に見られてる…

かりやあ…♡♡♡」

そう言いながらも抵抗する力は

どこか弱く、少し嬉しそうなダクネス。

こいつは筋金入りの『どM』だ。



くっつく♡

「カ…カズマ…」

指を挿れるんじゃないぞ?」

「そ、それだけは…」

阻止させてもらおうからな…」

と言いつつ、やはりいつもの  
握り潰されるような握力はなく  
ぐしよぐしよに濡れていたダクネスの  
割れ目に指が当たると滑るすべるように  
自然と膣内なかに入ってしまった。



んはあぁ♡♡♡

はいっでりゅん

うんんんんん♡♡♡

やばい…。

これがダステイネスお嬢様の  
腔内ななのか♡熱くて柔らかくて  
興奮を抑えられない♡

待ってるダクネス♡

サキュバスの夢で鍛えた

テクニックを見せてやるからな♡



じゅぽ♡じゅぽ♡じゅぽ♡

じゅぽ♡じゅぽ♡じゅぽ♡  
じゅぽ♡じゅぽ♡じゅぽ♡

「ん♡あっ♡やっ♡まっ♡

ま…てえ…♡♡」

カズマの手まんが始まると最初は  
少し抵抗していたダクネスも

指の動きに合わせてリズムの良い  
喘ぎあえ声に変わっていった。

「ん♡ん♡あっ♡あ♡あっ♡あ♡あ♡



じゅぽ♡じゅぽ♡じゅぽ♡じゅぽ♡  
じゅぽ♡じゅぽ♡じゅぽ♡じゅぽ♡

「あ、あの…カズマさん…?」

「凄いい音なんですけど…ちよつと…  
やりすぎ…じゃないかしら…」

「ダクネスの足…」

「ガクガクしてきてるんですけど…」

「それに…その…指2本で…」

「そんな激しく…壊れちゃいますよ…?」

そんな外野の声も聞こえてくるが、  
もちろん無視。

カズマの暴走は止まらない♡











必死に手まんを続けるカズマ。

じゅぽ♡じゅぽ♡じゅぽ♡じゅぽ♡

室内には音だけが鳴り響き、  
2人の『体力勝負』の様相に  
変わっていったと思われた直後…。

「はあああ♡カズマあ♡  
もうだめだっ♡♡」

先にダクネスの限界がきてしまい  
倒れるように壁に寄りかかり叫んでいた。

「げ、限界まで耐えたが…  
もう…無理だあ…♡♡

私の…負けだ…♡」

「イク♡イク♡

イぎゅ♡う♡う♡♡♡」





んんんん  
♡♡♡♡

服の隙間から大量に溢れだす  
ダクネスの愛液♡

盛大にイったダクネスは支えなしでは  
立てず、しがみついていた。





「どうだ？ダクネス♡

随分と気持ち良さそうだけど、

これは俺の勝ちって事でいいよな？♡」

「くっ……くそお……。

途中……何回……イカされようが……

耐えていたのだが……。最後は……足に

力が入らなくなってしまった……。♡」

何故か勝負の後のような会話をする2人。





「むふふ♡それが絶頂って  
やつなのかもな♡」

「何時でも披露ひろうしてやるから、  
また味わいたいなら遠慮なく  
部屋に来ていいんだぞ♡」

「う、うるさいっ！

行くわけないだろ！

調子の乗るんじゃないっ!!」



「……ん……くっ!」

「でも……まさか……2人の目の前で  
好き放題にされるとは……」

思わなかったぞ……。  
なんとというか……

本当に信じられん奴だ……!」

「こっちの辱めはぢかにも……」

目覚めてしまいそうじゃないか……!」

「い、いや……今のは

聞かなかった事にしてくれっ!」

「そ、それよりも……だ!カズマ!」





「これだけの事をして…  
まだチョーカーは外れていない  
じゃないか…」

ダクネスには悪いが、  
まだ始まったばかりだからな♡

「ぶら…」

「アクア、めぐみん…どうしよう♡」

「まだ最初の願いだとい  
うのに…これだぞっ!」

「何時もヘタレのカズマが  
今日は開き直ってるようだ…。  
覚悟した方がいいぞ」





「りよ、了解よ……ダクネス……」

「どうやら今日のカズマさんは……  
タガが外れちゃってるみたいね……」

ゴクリと唾を飲むアクアとめぐみん。





……その横でカズマは考えていた。

本番なしとはいえ、

ここまでの事を

してもお咎めなし…とがか…。


こいつら…本気で呪いを解くために  
身体を張るつもりなんだな…。

つまり、チョーカーが外れるまでの間は  
何をしても許される……これは…

童貞卒業どころの話じゃないぞ♡

むふふふふ♡





「にやけた顔しちゃって…  
気持ち悪いんですけど…」  
「カズマだったら…  
いきなりえらいものを見  
せてくれたわね…」

「覚悟はしてきましたが…  
カズマの変態行為は  
予想を上回りますね…」

——冷やかな目で見てくる2人。



「ん〜仕方ないだろ？」

俺も呪いを解くのに必死なんだよ…  
2人も協力する為に来たんだから？」

「特にアクア…？」

お前が原因だしな？」

「く〜…う…」

「そ、それを言われると  
言い返せないのよね…。まあ…いいわ…  
次は私がやってあげる」

「この水の女神がカズマの

欲望に塗れた願いを叶えて

あげようじゃないっ！」



「2人は打ち合わせ通り

サポートに回って頂戴!」

「カズマさんは、その汚い<sup>きたな</sup>シミが出来ちやっってるズボンもろとも服を全部脱いじやってよっ!」

「そして!そのびんびんに

膨<sup>ふく</sup>らんじやってる汚<sup>けが</sup>らわしいちんぽ<sup>ぽ</sup>を私の前に出しなさいッ!」

「よ、余計な事を言うんじゃねーよ!」

「それに汚くねーしっ!!」

毎日洗ってるしっ!!」









すんすんすんすん…  
「匂いは平気なようね……」



「ちゃんと洗ってるようだし、  
これなら大丈夫ね♡」

「クスクス♡  
こんなに大きくしちゃって…♡」

「カズマの要望通り  
“美人”の私が又いてあげるん  
だから感謝してほしいの♡」



ああ♡こっちの世界に来て初めて、  
この状況を作ってくれたアクアに  
感謝してるよ♡

背中にはダクネスの人肌♡

めぐみんの愛撫♡


そしてアクアのフェラチオ♡

これが4P♡

これがハーレムというものなのか♡

天国だ♡最高♡最高すぎるっ♡





……でも……少し不安だ。  
確かに用紙にはフェラチオの上手な  
お姉さんに又いてもらうと  
書いたけど……。  
本当にこの駄女神で  
大丈夫なんだろうか？

噛かまれたりしないだろうな……。

などと心配していたカズマだが……。



おふっ♡

「お…お前…」

上手すぎないかつ!？」

——アクアのフェラチオが始まるとそんな心配は消えていた。

「クスクス♡」

「カズマさんには悪いけど、

簡単にはイかせてあげないんだから♡」

「覚悟しなさいよ♡」



「まずは亀頭かびとうを責めて責めて、  
寸止すんどめを味合わせ<sup>すん</sup>せてあげるんだから♡」

——そう言おうと舌を上手く使って  
亀頭かびとうを執拗しつように刺激してくる。

その尋常じんじょうじゃないアクアの  
舌使したづかいいで身体がビクビクと反応する。

サキユバスの夢でも、こんな刺激は  
なかったかも…しれない…♡



「ちょっとカズマさん♡  
いい反応するじゃない♡  
少し楽しくなってきたかも♡」

「ここからはもっともっと  
我慢汁がでるまでイジめて  
あげるんだから♡」

アクアはニヤツと笑みを浮かべ、  
さらに激しく亀頭を舐め回してくる。

な…なんだこれ!?

射精感が高まるのに

射精できない…だとっ!?

悔しいがアクアのテクニクは  
本物のようだ♡



尚も続くアクアの猛攻で  
カズマの先端からは今までに  
出した事ない量の我慢汁が  
出始める…。

ぬ  
ふ  
っ  
♡

「お、おい!? どうしたカズマ!?  
急に空でも飛びそうなポーズをして…」





「クスクス♡安心してダクネス♡」

「気持ち良すぎて先っぽから

凄い量の汁がでるだけだから♡」

「まあ、ひきニーートには  
よく粘ったからね。

「褒美に一気にイかせて  
あげようかしらっ♡」

く、くそお…駄女神のくせに…  
駄女神のくせに…。



か  
ず  
つ  
♡

う  
ほ  
お  
♡

アクアは大きな口で  
限界間近のカズマのちんぽを  
啜くわえると搾しり取るように  
吸いついてくる。

♡  
じ  
え  
ん  
え  
ん  
え  
ん  
え  
ん  
え  
ん  
♡







ごめぱん♡♡ごめぱん♡♡ごめぱん♡

寸止めの後のアクアによる  
ディープなフェラ♡

く、悔しい…アクアにいらんよんて  
もてあそ  
弄ばれてるなんて……。  
我慢する間もなく  
射精してしまうカズマ。



ズ  
ピ  
ゅ  
ゅ  
♡

ズ  
ピ  
ゅ  
ゅ  
♡

ズ  
ピ  
ゅ  
ゅ  
♡









「し、仕方ないだろ…  
アクアが…限界の所に…  
急に啜くわえたからだろ……」

まさかアクアに  
こんな特技があったなんて…。  
なんだろう…最高に気持ち  
良かったのに敗北感を感じる…。



「にひひ♡」

「カズマさん♡カズマさん♡」



「これで『フェラチオ』と『顔射』の  
2つの願いをこの私が叶えて  
あげたって事よね!？」

「これは感謝してもきれない  
借りが出来たと思うの!!」





改めて願いを口に出されると……  
恥ずかしい……。……。

ってこいつ……

原因を作った張本人なのに、

借りを作る目的もあったのか……!!

「でもおかしいわね。私がここまで

したのにチョーカーがまだ

外れてないじゃない。

ハズレの願いだったって事かしら?」





「なんか納得いかないんだけど。  
まだ時間はたっぷりあるし、  
大丈夫よね！」

「私はちよつとカズマのくっさい  
精子を洗ってくるから続きは  
2人に任せたわよ！」

「お…お前！ 言い方ツ！！」

くそお…この駄女神めっ…！！  
呪いが解けた後…覚えてろよ！





「ふ…ふん♡

そういう事ならいいに  
私の出番というわけですね…」

「それでは真打ち

登場といきます……かつー!」

カズマが逃げ去るアクアに  
ツツコミをいれてると、  
めぐみんが目の前に立ち塞がってきた。



「めぐみん……」

「本当にお前もやるのか……?」

「無理しなくていいんだぞ……?」



「む、無理なんてしてませんよ」

「カズマがこんな事態に

なってる時に、仲間の私が

やらなくてどうするんですかつ!?」



「それに…カズマの用紙に  
書いてたじゃないですか…」



「ろ…ロリマンを弄るって…。  
変態…。」

威勢良く出てきたわりにこの娘…  
凄く恥ずかしがっている。



「あー……。そういえば書いた  
気がする……。かも」

——カズマは照れ臭そうに頭をかいた。



「本当にどうしようもない  
人ですね……」

「その願いは私じゃないと無理  
じゃないですか……」



「あの……ですから……」

「私のを……好きにして

いいですから……」

その……優しくして下さる……よう……」

めぐみんの言葉にドキツとするカズマ。





「本当にいいんだな……めぐみん？  
……いくぞ?。」

ベッドの上で後ろから  
めぐみんに抱きつくと  
カズマは何度も確認する。

「はい♡」

「これもチョーカーを  
外すためですから…」

「遠慮なくやっちゃってください♡」

「なんですかカズマ?もしかして、

「ジュジュきゅんてびゅんてびゅんしてるんですけど?。」





「そ、そんなわけないだろ!?!」

相変わらず強気なめぐみんだけど  
今日の主導権は俺だ♡

じっくり楽しませて  
貰いますよ♡





んんっ♡♡はあ♡あ♡  
あっ♡

ムフフ♡手を入れるだけで  
テンションあがりますな♡







んん♡やつ♡はあ♡だめ…え♡

カズマが指を挿れると、ぷつくりと  
膨らんだクリトリスが顔を出していた。

めぐみんのやつ、

気持ちよそそうにしちゃって♡

このまま弄<sup>もよほ</sup>り続けちゃおう♡



はあ♡カズマあ♡気持ちいいです♡  
そこ、やばいです♡

クリトリスを触り続けると  
めぐみんの力はどんどん抜けていき  
くちゅくちゅと音が出るほど  
激しく濡れ始める。

これこれ♡

俺はこれがしたかったんだよ♡

んっ♡あっ♡あ♡あっ♡もう…だめ…♡  
カズマやばいです♡  
本当にやばいです♡これ♡



An anime-style illustration of two young women. The blonde woman is in the background, looking surprised with her mouth open. The dark-haired woman is in the foreground, leaning over the blonde woman. She has a red 'X' on her forehead and a somewhat dazed or blushing expression. Both are wearing orange and black outfits with ruffled details. The background is a soft, pinkish-purple gradient.

「あ…あの♡カズマ…あ♡」  
「カズマ…そこはもういいですから…」  
「なんだか…切なくなってしまう…」

びくびくと小さく身体を  
震わせながら懇願こんがんするめぐみん。

—なんだかここまではめぐみんに  
ペースを握られてる感じだけど…  
ここからは…♡



ひ  
や  
あ  
あ  
♡

指を挿れた瞬間、  
めぐみんが大きく喘ぐ。  
あえ



ふぁい♡あ♡ふぁ♡あ♡やい♡

大股を開きカズマの指が動いたたびに一段と大きく反応するめぐみん。

むふふ♡手マンも始まった事だし、そろそろ試してみますか♡

カズマは膣内を優しく指先で押し始める。



んっ♡カズマ…ふかい…♡ですっ♡♡

……んん…どこかな？

指先で膣内を

隅々まで探している…。

「ふああっ…♡♡そっ…♡♡やばっ…♡ですっ♡♡  
そっ♡変な感じ…♡ですっ♡♡」

ひときわ大きく反応する場所を  
発見する。





ここがGスポットなのかな？♡  
ンフフ♡これがしてみたかったんだ♡

カズマが用紙に書いた願いは  
『Gスポット探し』

カズマは至福しきふくの時間を堪能たんのうしていた。



はああっ……♡

……カズマママ♡♡

「もう少し優しく……お願いします♡  
強く押されると……出ちやいます……♡」

「わかった♡わかった♡」  
「俺に任せとけ♡」

——カズマとめぐみんはダクネスの事も  
忘れてイチヤイチヤと  
2人の時間を愉たのしんでいた。



「ふ……ふふふ……ふふっ……♡」

「これは…何と言うっ”おあずけ”だ…♡」

「見てるだけでドキドキが

止まらないぞカズマ♡はあはあ♡」

「なあカズマ？このまま最後まで

するつもりなのか？♡♡♡♡」

——外野で興奮しているダクネスは

放置して、カズマは優しく愛撫を続けた。



「あの…カズマの願いの…  
ロリマンを弄るといっなのは…  
指だけなのですか？」

「…え？」

カズマは突然放たれた  
めぐみんの言葉にドキツとする。



「カズマ…そろそろ…  
次の願いにいっても…  
良いんじゃないでしょうか？」

た、確かにそうなんだけど…  
アクアやダクネスと違って  
めぐみん相手だと、  
どうしても躊躇ためらってしまう…。

——動揺しているカズマを見て  
めぐみんは少し笑うと、  
そっとカズマに手を向けた。





「お、おい…めぐみん？」

「…」までして何を

迷ってるんですか？」

「私も…もう子供じゃないと  
言ってるじゃないですか？」

「ぐわっ♡♡♡」

「先程から身体が…疼くんです…♡」

「カズマのを挿れて…くれませんか…？♡♡」





めぐみんにここまで言われたら  
やるしかないよな……。  
覚悟が足りないのは  
俺の方だったか……。

「ハアハア♡

な、なんとという展開だ……♡カズマ♡  
さすがにこれは断れないぞ……?♡♡」

——う、うるさいな……ダクネス。

言われなくてもわかってるよ……。

意を決してカズマはめぐみんを押し倒した。





「めぐみん……。ここまで来たら  
俺も引き下がれないからな……?」  
「いいんだな?」

——何度も確認するカズマ。

「何を言ってるんですかカズマ……♡  
引き下がる必要なんてないですよ?」

くうう♡なんだこの恋人

同士みみたいな会話は♡

呪いの解除のためとはいえ、

ずっとドキドキが止まらな♡♡♡♡♡



んふううう…♡

先っぽが挿入はいっただけで

膣内なかの熱さに腰がとまるカズマ。

むっむっ♡

き、気持ち良すぎる…♡

ちんぽが包み込まれそうだ♡♡

これはやばい…

よ、よし…ゆっくり挿れよう…♡



んんんっ…♡

「カズマのが…挿入はいってます♡」

ぐべべべ…♡

「ついに私たち…」

「線超えちゃいましたね♡」

「お、おう…」

駄目だ。すぐに動いたら  
まずい気がする…。

「俺が動くから…なの？」

「めぐみんは動かないでくれよ？」



んぱん♡♡

「んぱん♡♡」

「はい♡わかりました♡

私は動きませんよ♡」

——とりあえず俺の知ってる  
エロ知識を総動員するんだ。  
まずは『いきなり動かさずに  
ちんぽの形を覚えさせる』って  
なんかで見た知識を使おう。  
その間…最初にする事は……  
キス…だったはず。



んふ♡カズマあ♡んっ♡  
好きです♡カズマ…♡ちゅ♡ちゅ♡

「お、おいおい♡2人とも  
私の存在を忘れてないか?♡」

そんなダクネスの言葉は2人には  
もう届いておらず夢中でキスを続けた。



んっ♡んん♡んっ♡んっ♡んっ♡

お互いを求めるように舌を入れ  
絡ませる『大人のキス』

まさかめぐみんとこんな濃厚なキスを  
する事になるなんて脳が蕩とろけそうだ…♡





ぷはあ♡

「カズマ♡なんですかこれ……？」

「こんなキス……して♡

頭がどーになっちゃいそうなんです♡♡」

「ああ♡俺も同じだよ♡」

キスする度にめぐみんの下の方が  
びくびく反応して……めぐみんと  
繋がってるのを凄く感じた♡



「その……ところで……カズマ……」

もう我慢できないんじゃないですか?」

「別に……好きに動いてもらって  
いいんですよ?」

「じゃないと……」。

私が先にカズマを

イかせちゃいますよ?♡♡♡」





また強気な事を言っちゃって…

めぐみんらしいけど…そうはいかない。

めぐみんに良い様に  
されたら…今後何を言われるか  
わからないしな……。

サキュバスの夢で鍛えた俺の  
実力を見せるしかないっ！



ぶあああああ  
あああああ♡♡♡♡

パン♡パン♡  
パン♡

——カズマのピストンが始まると  
先程までの強気な発言をしていた  
めぐみんは消えていた。



あっ♡んっ♡

これ♡マジですが♡

ズン♡

今の俺は言うならば素人童貞っ！  
がんがん突かせてもらいますっ！！

「や、やりますね…カズマ♡まさか  
これほどは、思いませんでした♡」  
「爆裂魔法に匹敵するほどの快感です♡」



むふーっ♡

急にそんな台詞を聞くと  
舞い上がってしまっ♡

俺はもしかして、じゃんけん以外で  
えっちの才能があったのだろうか♡

よし！全力で腰を振っちゃうぞっ！

ふん♡ふん♡ふん♡ふん♡ふん♡

「ああっ♡なんですか♡  
張り切りすぎじゃあっ♡」







ふん♡ふん♡ふん♡ふん♡ふん♡  
ふん♡ふん♡ふん♡ふん♡ふん♡

「ちよ、ちよっ♡と!!あっ♡ばかっ♡

急にオークみたいに盛りさかりすぎです……!」

「やだっ♡♡まだ激しくなるんですか!」

「んんっ♡♡もっ♡♡

なんか出ちゃいそうです」

「カズマ…少し抑えて…くくださっ♡♡」



「もうばかっ♡  
話を聞いてくださらよ♡」

ふん♡ふん♡ふん♡ふん♡ふん♡

めぐみんには悪いけど止まらないんだ♡  
体力の持つ限り続けていたいけど…

……あっ。やっぱり無理…だ。  
ちんぽが膨らんで…  
これは我慢できないやつだ…。



ちよ♡

ビビン♡

やだ…♡ふかい…  
おく…だめえ♡

ふあああああ♡♡♡♡♡  
でちやい♡♡♡♡♡

い<sup>も</sup>あああああ♡♡  
漏れちやい♡♡♡♡♡



♡ ぶんぶ

はあ ああ ああ

あああ♡♡♡





んふう…途中から興奮して必死に  
腰を振ってしまった……。  
めぐみんもイったようだし…まあいいか…。

そして俺は……

完全な賢者になってしまった…。






「カズマ……。何…満足そうな  
顔をしてるんですか…?」

「いきなり…あんなに  
激しくするとか…壊れるかと  
思いましたよ……」





「それに……」んなに  
びゅるびゅる」と射精して……  
身体中「べとべと」ですよ♡」

「カズマのちんぽは  
どうなってるんですか……♡」



たしかに凄い量を  
射精だしてしまった…。  
恐るべし…。…ロリマン…。

「めぐみん悪い。  
気持ちよすぎて途中でから  
夢中になってたわ…。」





「なるほど……。  
そういう事でしたか……」

「つまりそれは……  
私のが気持ちよかった  
という事ですね？」

「そういう事ですよね!!  
どうなんですかカズマっ!!」

この娘はまた急に  
照れ隠ししちゃって。



「そうだよめぐみん。  
120点だったよ」

「そうなんです♥  
むふふっ♥

それなら仕方ありませんね♥  
「許してあげます♥」







「おい…めぐみん、カズママ♡  
イチヤつくのは  
それくらゐにしてくれ♡」

「いつまで待たせるつもりだ♡」





「私はもう限界なんだ♡  
私も混ぜてくれ♡」

「まだチョーカーは外れてないし  
続きをやるつもりなんだろ?♡」

「早く♡早く♡」

「私にもそれをくれ♡」





いつの間にか消えいた  
ダクネスだが……。


ふーっ♡ふーっ♡ふーっ♡ふーっ♡ふーっ♡

——あっ……これは。

ダクネスのやつ……

耐えきれずに一人でオナってたな……。





「ダクネスだったら…仕方ないですね…」  
「ここからは予定通り  
総力戦といきますかっ!」


「カズマ! やっちやってくたやっ♡♡」

「ええ?」

「やって、いいのかめぐみん?」

——てっきり阻止してくると  
思ったんだけど…。





「呪いが解けるまでには3人で協力する約束ですからね♡」

「これは共闘のアツい展開ですよっ!!!」

「そういう事だカズマ♡  
♡♡♡早く♡♡♡」

それはわかったんだけど……。







「安心しろカズマ♡」  
「お前の大好きなおっぱいで  
復活させてやるからな♡」

はぁ♡

はぁ♡

「これがカズマのご希望の  
プレイなんだろう♡」



「こっちはやって挟んでやれば  
元気になるんだろ?♡うっへ♡」

んんっ……。

賢者になった俺のちんぽが…  
大きなマシユマロに  
包み込まれている♡

むいゅ♡

んんっ…これはダメだ…あ…♡  
いやおうな  
否応無しに反応してしまう♡







ちんぽを元気にする為に  
一生懸命のダクネス♡

これだけでも最高の  
シチュエーションなんだけど…。

でも惜しい…惜しいんだよな…♡  
こういう時は「目」でも  
楽しませてくれないと。



ズルン

ほいっ♡

「お、おい…カズマ?」

「おおお前、

何をするんだっ!？」

「食い込む……だろお?♡」



「すまんすまん♡」

お前の乳首が見たくてな♡」

「ごうした方が

復活も早いってもんだ♡」

うひっ♡

「そうきたかつ♡」

「やっぱりカズマはわかってるなっ♡」  
「その調子でやってくれっ♡」



おっ♡

うひひっ♡

「意外と早く復活したな♡

そり返ってはみ出ってしまったぞ♡」

ポロ♡

「よし！元気になったのなら

早速いかせてもらおうかっ!!」







A pregnant woman with long blonde hair is shown from the waist up, wearing a purple bikini. She is holding her large, glowing white pregnant belly. A man in a purple suit is embracing her from behind, his hands resting on her belly. The background is a dark red, textured surface.

「こ、これがカズマのちんぽなのかつ!!  
お腹の圧迫感が指の比じゃないな♡」

「おいカズマ!」

「この後はどうすればいいんだ!？」

「早く命令してくれっ!!!」





「よしよし、わかった」

「お前の鍛えられた筋肉で

どちらかが先にいくまで全力で

腰を振ってくれ♡」

「いいな？」






「ふふふ♡そういう事か…」

また勝負という事だな♡任せとけ♡」

「うひひ♡自分で動くのも

中々難しいもんだな♡はあはあ♡」





「おい。もっと上下に大きく動いてくれよ。  
お前のおっぱいが目の前で揺れる所が  
見たいんだからな♡」

「カズマ…お前ってやつは……♡  
揺らせばいいんだな♡」



「そうそう♡」

「もっと上下にばいんばいと

揺らすんだ♡」

「いい調子だぞダクネス♡」

はあ♡

はあ♡

「本当に…カズマは容赦ないですね…。  
なんだか命令に遠慮がなくなってきました」



「だって仕方ないだろ?」

「タイムリミットも迫ってるし、

俺は今日、何発も射精してるんだぞ?」

「2人がもつと頑張ってくれないと

呪いは解けないぞ♡」

ばいん♡

ほん♡

「なんだかいつものカズマになつてきましたね……」



「んきゅー♡カズマすまないっ♡」

「早々に私がいきそうなんだが♡」

「どうしよう♡」

はあ♡

はあ♡

んきゅー♡カズマ♡  
どうしようもなくて♡  
私はどうも♡





「何？ダクネスは  
仕方ないやつだな♡」

「でも休んだら駄目だぞ？  
少しでも休んだら  
お仕置きだからなーっ！」

「いくまで全力で腰を振りなさい」

×うっひっひっ♡♡♡







「ダクネス終わったのなら  
交代ですよー!」

「ああ♡了解だめぐみん♡」

「次々やらないと  
時間制限内に間に合わないしな♡」



んんっ♡

ズポツ♡

「やっぱりカズマのは大きくて…  
全部は挿入はいきりませんね…」



「そうだろう♡そうだろう♡」

「ところでダクネス！」

「お前も休憩してる場合じゃないぞ？」

「こっちにきて手伝ってくれよ♡」

はぁ♡





「ふふふふっ♡  
これでいいのか？カズマ♡」

「よしよし♡」  
「ララティーナお嬢様も  
常識というのがわかって  
きたじゃないか♡」

「ま、またお前は名前を……」  
「まあ……いい……」  
「それよりもカズマのは大きすぎて……  
めぐみんのだと……キツそうだぞ？」

♡♡♡

♡♡♡



「そうなんだよな。  
めぐみんは無理するなよ?」  
「ろりっ娘には俺の“デカチン”は  
辛いんじゃないか?」

「な、何を言ってるんですか!?!」

「ちゃんと見てくくださいよ!  
もうほとんど挿入はいりましたからっ!?!」





「はあ♡♡の快感♡♡♡  
やばいですね♡♡」

「爆裂魔法と同じで  
癖になってしまってます♡♡」

——めぐみんのおそこは  
全部は挿入いりきらないぶん、  
締めつけがとても強い♡  
この圧迫は俺も癖になりそうだ♡♡

おん♡

♡♡♡



めぐみんの騎乗位にダクネスの愛撫♡  
『これがハーレム♡♡これが  
ハーレムなんだな♡♡』

「はぁ♡やばいです♡  
なんでこんな気持ちいいんですか♡」

♡♡♡

「って何、泣いてるんですかカズマ…」



「おい！めぐみん！！

次は私の番じゃないのか？」

「何を言ってるんですか？

まだ私はイってませんからっ♡」

めぐみん



「あっ♡そこですカズマ♡  
もっと動いても平気ですよ♡♡」

「…んぐう♡私もまたやって  
欲しいのだが……」

—— なんとという事でしょう……  
2人が俺のちんぽを  
取り合っているじゃないですか♡





「おいカズマ！」

次は私の番だからなっ!!」

BWA

「わかってるわかってる♡」

「ダクネスは

少し待っててくれよ♡」

「そうですねよ♡

もうすぐ変わりますから

ダクネスは大人しく

待っててください♡」



あひ♡

「カズマいい感じですよ♡」

「いい感じですよ♡  
カズマあ♡♡」





「これだ♡」  
「これっ♡」  
「んんっ♡」  
「この快感ッ♡」

「1人でするのは比べ物にならない♡  
私も癖になってしまっそうだぞ♡」

1490-3♡



「ダクネス！」

「しっかり腰を振って  
俺に奉仕してくれよ!!」

「ふひっ♡」

「私には容赦がないな♡」

「よしー!いいだろう!」

次こそ私がカズマを  
イかせてやるからなっ♡」



「この腹に  
突きさされた感触♡」  
「たまらんぞカズマ♡」

——嬉しそうに尻を振っちゃって  
そんなに俺のちんぽが  
待ち遠しかったのか♡



「本当にダクネスは  
エロいやつだったんだな」

「ああ!!私ハエロいつー!!」

「それに性行為がこんなに心躍る  
ものだったとは知らなかったぞ♡  
カズマ!!私ハ虜になつてしまひそうだ♡♡」

♡♡♡♡♡



「ふふふ♡それに……」

私はこれからどんなプレイにも耐えてやるんだ!♡」

「そして……わわ私は……」

ど、どんな行為も道具も……」

すでに妄想済み……だ♡」

「かつ……カズマが……  
何をしてきても……  
何度イカされても……  
耐えてやるんだっ♡」

220♡

——こんな事をしてる最中なのに……  
やっぱいろいろは真性だ♡









「ああ!!もう!!」

「ダクネスにあれだけの事を  
しておいて、交代するなり  
どんだけ元気なんですかっ!？」



「あれれ？ダクネスには  
負けないとか言ったのは  
めぐみんじゃなかったか？」

「そうですが…  
ちよつとカズマ……  
調子に乗り過ぎじゃ  
ありませんか？」

「ねえダクネス……？  
このままでは屋敷での  
優劣が大変な事に  
なってしまうですよ！」

「あれ？ダクネス聞いてますか？」



「うへへ♡これから私は…  
一体どうなってしまうんだ♡」

「ちょ…ちよつと何、

安心してんですか!」

「やっぱり、こんな傍若無人ほんじやくぶじんな事を  
許していたらやばいですよ!」

「ダクネス!しっかりして下さいよっ!」



「あーっもうっ！  
カズマ!!気持ちがいいのは  
わかりましたから  
待っててくださいっ！」

「ダクネスもカズマを  
止めてくださいっ！」

「って…もう2人とも話を  
聞いてくださいっ！」

「またイっちゃっう…  
イっちゃいますから  
落ち着いてくださいっ！」

♡パン♡

♡パン♡

♡パン♡






.....ん





——めぐみんにそう言われても  
一向に呪いは解けないし、  
性欲がおさまる気配もない





——それに、これだけ  
好き放題しているというのに  
途中から射精もしない





——んん…俺ってやっぱり  
運よりも、こっちの才能の方が  
あったのかもしれないな♡



「おーいめぐみんー!」

「休んでるところ悪いんだけど  
まだ呪いは解けてないんだぞー」

「まだまだ  
付き合ってくれよーっ!」



「は？」

「何か言いましたか？」

「散々、人の言う事は聞いて  
くれなかつたのに……」

「もう私は身体が動かないので  
少し休ませてもらいますよ……」

はあ♡

はあ♡



「なんですとかカズマ？  
まだやるんですか？」

「もしかして、こんな状態の  
私にするつもりですか？」

「無理です！もう無理です！」

「私じゃなくてダクネスにして

あげてください！！

ダクネスならきつと平気ですから！」

待って♡  
待って♡



「あ、あの…カズマさん…  
聞いてますか？」

「私は今、動けないんですよ？  
本気ですか…？」

わち…  
あ…♡



「なあめぐみん？」

「これから俺は爆裂後も

遠慮せずにやるつもりなんだよ」

「となると予行練習を  
しといた方がいいだろ？」

「爆裂後って……」

もしかしてカズマは…

外でもするつもりなんですか？」



「あたり前だろ？」

動かないめぐみんを前に  
今まで「ずつつつつつと」

我慢してたんだぞ?」

「……までした仲なんだ。

もう別にいいだろ?」

ぷいっぴ

「……あう」

「なんだかもう……訳がわからなく  
なってきました……」

「今日はカズマには逆らわず  
従うのが決まりですから」

カズマのしたいようにしてください」



ふあはああああああ♡♡

はあ♡

やい♡

「やっぱり……うなるんですね……」  
「でも……なんでこんなに  
気持ちいいんですか……ばか」



「もう限界だと……  
思ってたんですが……いけますね♡」

「これは……ゆんゆんに  
教えてあげましょ♡」

「おい。ゆんゆんには  
絶対に言うなよ」

「それよりめぐみんは  
前と後ろどっちが好きなんだ？」



「う、うるさいですわっー!」

「変な事を

聞かないでくださいっー!」

あ♡

あ♡

「む、無理やりやってくれるけど……!」  
「変態な上に……!」  
「意地も悪かったんですね!」



はあ♡

「そ、そんな事はいいんですー!」

「カズマは早く呪いが  
解けるように

真剣にやっつてトギらよー!」

「死なれたら

困るんですからねー!」

「それと…爆裂後の事とか…  
今後の事は……。」

終わった後に2人で

話し合いますからねっ!」





「了解だ♡めぐみん♡」

♡んんんん♡

♡パイパ♡

「また…激しく…」んんんん」

♡パイパ♡

「なんかカズマに主導権を握られてるみたいで許せません!」

「絶対に話し合って貰いますからね!」







…はあ♡

「最高でした♡」

「これはお母さんにも  
報告しなさい♡」

Burp

♡

「いや、母親にも絶対言うなよ」



「とっろでカズマ?どうですか?」

「さすがにチョーカーは  
外れたんじゃないですか?」

「いや…それが  
まだなんだよな…」

「マムジマですか?」

「一体今回の願いはなんなんですか?」



「うーん。色々な事を  
試したんだがなあ」

「他に思い当たる節も  
ないわけでは…ないけど…」

「ま、まだあるんですか!？」

「やっぱりカズマの頭の中は  
そういう事ばかりなんですね……」



「はあ…疲れましたね…」

「そうだな…あそこは

元気なままだけど、体力がもたん♡」

「何馬鹿な事を言ってるんですか…  
私はもう無理ですからね…」

「それで…ダクネスに刺さってる  
その道具はなんなんですか?」

「ん?あれはバイブっていう

大人のおもちやだ♡

試験中なんだが、

今度めぐみんも試してみるか?」

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡



「で、「この後は  
どうするつもりですか？  
このままじゃカズマ、  
死んじゃいますよ？」

「そんなものまで裏で  
作ってたんですか……。  
本当に信じられませんね……」

「け、結構です!!」

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡



「そうだなあ」  
「残ってる願いを試したいんだけど  
アクアはどうした？」  
あいつの力が必要なんだが……」

「アクアは途中から別室で  
飲んだくれてましたよ。  
連れてこようとしたんですが  
爆睡してたもので……」





「あいつフエラだけやって

酒飲んで寝てたってか!？」

「めぐみん!!あいつが

言い出しっぺなんだよな?。」

「そうですね…最初に

話を持ち掛けたのはアクアです」

「なら残りの願いはやっぱりアクアに  
叶えてもらおうしかないなっ!!」



「ヨシッ！」

「めぐみん！ダクネス！  
手伝ってくれ!!」

「……ふえ？」

「ふふふ♡良いですね♡  
面白そうな展開じゃないですか！  
複雑な気持ちもありますが…  
カズマに力を貸しましょうっ!!」





「……んん？」

どうしたのカズママ?」

「あつ……そうだカズママ……」

チョーカーは外れたの?」



「って…ちょっと…何これ!？」

「2人で何してんのっ!？」

「やあ…っ♡ま、待ってー!待ってー!

「これはどっしっし事なの!？」

「やだ♡ダクネスちょっと  
何揉んでんのっ!？」

「めぐみんも…どっ触ってんのっ!？」  
「やだ…寝起きと酔いで力が  
入らないんだけどっ!？」





「へえ〜アクアも綺麗なピンク色  
なんですわね」

「まあ私にはかかないませんですけどね！」

「ちよつとめぐみん!？」

何を言ってるの!？」

「そんな所…触っちゃだめだって！」

カズマも2人を止めてよ!？」





「なんで俺が止めるんだ?」

「2人は俺らの為に

協力してくれてるんじゃないか♡」

「まだ呪いは解けてないんだぞ?」

「最後はお前が相手しろよっ!」

「え?…え?」

何?何言ってるの?」

「私は口でしてあげたじゃない!?

カズマ…私を襲う気なのっ!」



「どうせお前は精液も  
浄化出来るんだろ？  
なら大丈夫じゃないか」

「出来る…出来るけど……  
万が一って事もあるじゃない？」

「ねえ聞ってる皆？  
それとも2人はカズマと  
やっっちゃったの？」

「そういう事です。  
後はアクアだけですよ」

「そうだぞアクア。  
アクアが原因だし提案したのも  
アクアじゃないか観念するんだ♡」



「え、えええ…うそお…  
カズママ…さん？」

「そんなもの出しながら  
近づかないですよ…  
ねえ嘘でしょ!？」

「…待って…待ってよっ!？」







「って何してんの!!」「わっ!!」

「カズマー!!これ何やってんのよ!!」

「おもちや♡」

「これはだな…まだ試してない  
プレイの同時体験って所だな♡」

「どうだアクア?」

開発中の玩具の具合は?」



「どうだって……こんなの  
気持ちいいわけないでしょー!」  
「めぐみんも止めてよっー!」

「嘘つかないで下さい。  
見ればわかります。  
アクアのあそこ……  
凄く濡れてびくびくしています」

「だよな!これは成功だな!  
「儲け出来そうだぞ♡」

「ねえ何言ってるのよっ!?!  
ちよっとダクネスも離してよっ!」









「うううううう……。」

わかった…わかったわよ…

さっさとやって呪いを解きなさいよ…」

「でも…カズマの最初から  
“ぬるぬる”なんですけど」

「し、仕方ないだろ!!」

「さっきまでやってたんだからな」

「うう……私が「」までするつもりは…  
なかったのに…もうカズマの好きに  
すればいいじゃない」

「さすがアクア!そうこなくっちゃな!」

「よし次いくぞっ!」



「もう……どうしよと擦こってこのよ…  
クズニートっ!!ちよと  
挿れちやって終わらせしよっ!!」

「ん?」

「そんな事言っているのかな?  
一気に奥まで挿れちゃうぞ?」

♡ちよ♡  
♡ちよ♡



「いつから

早くやんなれよー」

「ちゅ♡  
♡ちゅ♡」

「あんたのちんぽなんて  
どうせ大した事ないんだから  
平気に決まってるじゃないっー」

「言ったな駄女神っ!!」

「望み通りにしてやるよっー」



ぶ  
ええええ  
っっ  
!!??









「ふははっ♡」  
「俺のちんぽを侮あなごっていたなっ！  
今からお前の膣内なかを丹念たんねんに  
突いてやるからな♡」

「覚悟しろよっ！」



「いやあああっ!!」  
「奥をぐりぐりしないでよっ!」  
「そんな強く押し付けないでっ!」



「どうだアクア？  
子宮を押されてる感覚は？」

「だ、黙りなさいよ……っ！」

「カズマのくせに調子乗り過ぎよっ！」  
「クソニート…ヒキニートツ！」





「ああもう…なんでカズマなんかに  
感じさせられてるのよっ!」

「いんなはずじゃなかったのにつ!!」

「どうせお前はめぐみんと  
ダクネスの2人にやらせて  
逃げるつもりだったんだろ?」

「後でネタにでもするつもり  
だったんだろ?」

「そうはいかないんだよっ!!」



「うーじゃないー！うーじゃないっ！！」

「死んでも私が

生き返らせられるんだからっ！！」

「カズマは笑いの

ネタになるのよっ！！」

「宴会の時に評判が

いいんだからいいじゃないっ！！」

「うーいっ……！！」

やっぱり全然反省してやがらないなっ！！  
もっと恥ずかしい目に合わせてやる！！



「めぐみん！ダクネス！」

「今から全力でやるから  
しっかりアクアを見ててくれよ！」

「いいでしょうカズマ！」

自称女神のあられもない姿を  
しっかり目に焼き付けますよ」

「え？…え？…何するつもりなの？！」





「うそ!? やだ! やだ! やだ! ああ!」

「カズマっ! 女神になんて  
格好させるのよっ!」

「ちょ、ちよっと2人も

まじまじと見ないでよっ!」





「カズマに突かれて  
よがってるくせに何が女神ですか」

「そう言ってるやるなめぐみん♡」  
「それになアクア。これは私たちに  
押し付けようとした罰だからな」

「今回ばかりはしっかり  
罪を償うんだ」



「うんうんうんうん……うん」

「こうなったら……カズマに  
イカされる前に呪いを解いて  
終わらせてやるんだから……」

「カズマは猿みたいに  
腰振って果てなさいよっー」





「な、何が猿みたいにだつ!」

「めちやくちや感じて愛液も  
でまくってるくせに!」

「お、お前の方がもうイキそう  
たまらないんだろっ!?!」

「そ、そんな事あるわけないでしょー!」

「カズマのなんて膣内なつかで

ぴくぴくして今にも破裂はれっしそうに

膨らんでるくせにっ!!」



「よーしっー！」

「そこままで言うのなら  
全力でやってやるよ!!  
力尽きるまで  
腰を振ってやるよっー！」

ずほっほっ♡



「いやーっ!!!」

「ごめんなさいっ!カズマ様ツ!  
調子に乗りました!」

「もしもしゆっくら…」

「ゆっくらゆっくら!!!」

「こんなの…駄目だって…  
きちやうから…ゆっくら…  
ゆっくらゆっくら!!!」



「もう遅いって！アクアの膣内なか  
気持ちよすぎだろっ！」  
「止まんねーよっ！」

「あ、当たり前でしょっ!」

「女神の膣内なかなんだからねっ！」  
「最高に決まってるじゃない!!  
ってそうじゃなくてっ!」



「こんなにされたらイっちゃうから!」  
「壊れちゃうっ!壊れちゃうから!」

「何言ってるんだ!」

「煽ってきたのはアクアの方だろっ!」  
「ほらっ!イケよ!早くイケよ!」





「やだやだやだっ！  
やっぱりカズマなんかには…  
クソニートにイカされるのは  
嫌なのっ！」

「私のプライドが許さないのっ！！」  
「いっ、いっ…」  
「この後に及んでまだそんな事を！」  
「絶対にイかせてやるっ！！」

あ♡

あ♡

あ♡

「いっや——っあああっ！！」





あ♡



あ♡



「ふう♡我慢できずに  
イッてしまった」

「でもアクアもこれ  
イッてるよな？  
引き分けって所か♡」

「う、うるさいわね…  
少し黙りなさいよ…」

ぐっぐっ♡

じゅん♡

うそでしょ…やだっ

膣内なかが熱いんですけど…これ…

子宮の中にカズマの射精たされちゃってる…




ピュリファイケーション……  
ピュリファイケーション……  
ピュリファイケーション……

ど〜んど〜ん……♡

——早く浄化しないと……  
はあ今回の原因は私だし  
仕方ないんだけど  
カズマのくせに気持ちよかった  
のがなんかむかつくわね……

「はあ……それでどうなのよカズマ？」  
「これで呪いが解けて  
なかったら許さないんだからね」





「おう!!アクア朗報だぞ!」  
「中だしした直後にチョーカーが  
外れたんだ!」

「さすが女神だな!」  
「一時はどうなる事かと思っただけ  
これで痛い思いをして死ぬ事は  
なくなったぞ!」



「そ、そう…それは良かったわね」  
「天界一の女神を  
抱けたんだから感謝しなさいよね」

「ああ♡わかってる♡  
凄く良かったぞー！」  
「だからさ…もう一回くら…  
いらよなっ？」

「へ？」



ちよ♡

「ちよ、ちよつと何また  
挿入れようとしてんのよ!?!」

「中だしがあまりに  
気持ちよくなってな♡」

「アクアなら浄化もできるし  
もう一回くらい平気だろ?」





「呪いは解けたっつてのに  
あんた何言ってるのよっ!」

「いいわけないでしょ!!  
早く放しなさいよっ!」

「アクアも気持ちよかったんだろ?  
もう一度イカせてやるからさっ♡」



「べー」の変態おやじよー！

「許そうと思ってたのに……」

「のっ！！調子乗りすぎだつてのっ！！」









「ま、マジですかっー！  
クリーニングヒットしましたよ!？」

「凄い勢いで頭を  
壁にぶつけましたけど  
大丈夫なんですか!？」



「平気よー！平気よー！！」

「この馬鹿には釘を  
刺しておかないと  
これから何をされるか  
わかったもんじやないわっ！！」

「絶対に調子に乗らせちゃダメなのよー！  
それに死んでも  
生き返らせればいだけでしょっ？」

「ま…まあそうですね…」

おわり



あとがき

お買い上げありがとうございます。  
『とらや』と申します。

今作はこのすばの新作アニメ2本の発表を見て  
テンションがあがって制作を開始しました。  
どちらも楽しみで今か今かと待っている日々です！

といつも開始は良いんですけど、前作と同じで  
そこから完成まではかなり時間が経ってしまいました…が  
このすばメンバーを楽しく描けたので最高でした！

OVAの呪いのチョコカーの話よりも  
調子に乗り過ぎてしまったカズマさん  
のお話でした。

と言っても3人との生活は日々悶々と  
して耐えれないと思います。カズマさん  
まじパネーです。

そして購入して頂いた方々にはアニメが  
始まるまでに少しでもこのすば分を  
補充して頂けたら嬉しいです。

次のページからはおまけ話と  
脱衣差分イラストがごさいます  
ので楽しんで頂けたら幸いです。

pixivID : 28197354

Mail : trayadoujin@gmail.com

Twitter: @doujintraya

FANBOX:

<https://www.fanbox.cc/@traya>





「…………カズマさん」

「…………ん」



A character with purple hair, purple eyes, and white wings. She is wearing a blue dress with yellow accents and a necklace with a pink gem. She has a slightly nervous or questioning expression.

「……………カズマさん  
聞えますか?」

「……………あれ……ハハハ」



「エリス様……？俺は一体……」

「アクア先輩のゴツドブローで  
吹っ飛んだ後、壁に頭を  
打ってしまわれて……」

……あつ……なるほど。







「カズマさん……またこんなくだらな  
死に方をして……  
死んでしまうとは情けない……ですよ？」







「でもエリス様…今回は少し  
やりすぎたかもしれませんが  
俺のせいではないと思うんです……」

「ま…まあ、そうですね……」

「アクア先輩は加減を知らない  
というか…なんというか……」







「そうなんですすよっ!」  
「折角呪いが解けたっつてのに  
これじゃ意味ないですよね?」







「ところで…カズマさん…  
ちよつとよろしいですか？」

「はら？」  
「……どうしました？」



「あのカズマさん…今あなたは服を  
着てないんですよ…?」  
「わかってますか?」

「その…近づかないでくれますか?  
前が…見えてますよ…?」

「それは失礼しました」

「でもエリス様?」  
「エリス様も失礼ですが  
スカートの方が濡れてるよう  
にお見受けしますが?」



「えっ!?!」

「いや…あの…」

「これは違うんですっ!」

「み…見ないでくださいっ!」

あや♡

「エリス様は先程から

僕の事情を知っているようですよし  
ずっと覗いでたって事ですよね?」

「え…あの…それは…」





ステイール  
!!



「ちょ、ちよひっよ」

何してるんですかっ!?!」



♡♡♡

♡♡♡



「ほら♡パンツがぐしよぐしよ

じゃないですか♡

これが動かぬ証拠って奴ですね♡」

「いやーっ!!!」  
「見ないでトキカスー」  
「パンツ返してっー!」





「ほらっつゝこれ〃がほしいん  
じゃないですか？」

「いやっ…あの…近かづかないで…」  
「ほしいとか…そんなわけ…」  
「ありませんから」

「なら下界での借りを返して  
貰うって事ならどうですか？」  
「あの時の貸したままですよね？」





「えっ?」

「いやっ…それを言われると…  
私も困るんですけど…でも…  
このような事で返すのは……」

「え……ええ……」

あの…どうしましょう…」



「って…ちよつと待っていてください」  
「待って!待って!!」  
心の準備がまだ…なので…」







あーあーあーあー!!



「エリス様の  
少しまついでですね♡」

「あのカズマさんっ優しく…  
優しくお願いします♡」

「パッドが…パッドが飛んじやってる…!!」  
「そんな事は気にしなくて  
いいんですよエリス様♡」

「それよりもやっぱり  
覗いて興奮してたん  
ですね？我慢しなく  
ても俺ならいつでも  
お相手しますよ♡」



「違うんです!!」

「違わないけど…違うんですっ!」

「これは下界でのお礼ですから!」  
「それだけですからっ!!先輩達には  
絶対秘密にして下さいよっ!」

「わかりました♡エリス様♡」  
「そういう事にしておきます♡」



「……カズマさん、カズマさん。聞こえてる?」

「さっきは悪かったわね。

まさかあれで死ぬとは思

わなかったのよ」

「反省して復活させたから

エリスに言って早く帰ってきななごらよ」

「おう!了解だアクアッ!

でも少し用事が出来たから

待っていてくれよーっ!」

★エリス様のおまけでした。次ページから差分になります。























































































































































































































































































































































